



千葉県いすみ市

100%有機米の学校給食を実現する

■千葉県いすみ市における有機農業推進の経緯

- 2012年 コウノトリの兵庫県豊岡市をモデルに「生物多様性」と「水稻」の2部門による協議会を設立
会長を副市長、副会長をJA組合長、事務局を農林課が担う
この時点で地域における有機農業者はゼロ
- 2013年 手探りの水稻無農薬栽培に挑戦するも失敗
- 2014年 水稻有機栽培の実証事業(3年間)開始
民間稲作研究所、県普及指導員、JA、市が連携
- 2015年 生産された有機米4トンを学校給食に導入
- 2017年 学校給食の全量にあたる42トンの有機米を提供
有機JAS認証取得開始 産地を形成
- 2018年 同協議会に有機野菜部門を設置
学校給食に向けた有機野菜の生産と産地化への取組を開始

いすみ市の事例＝いすみモデルは、

「**公民協働による有機米産地形成モデル**」の一つ

いすみ市の場合は**有機米の学校給食利用に特化**していることが他地域と異なる大きな特徴

【お手本とした事例】

兵庫県豊岡市「コウノトリ育むお米」

滋賀県高島市「たかしまいきものの田んぼ米」
など

【学校給食利用における政策的根拠】

愛媛県今治市がバイブル

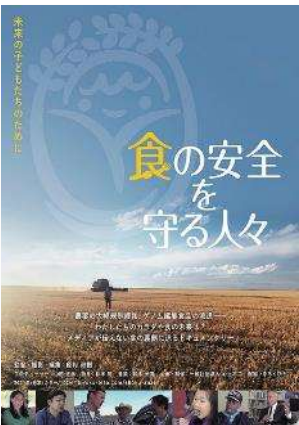
『地産地消と学校給食～有機農業と食育の
まちづくり～』（著者安井孝、発行者大江正章）



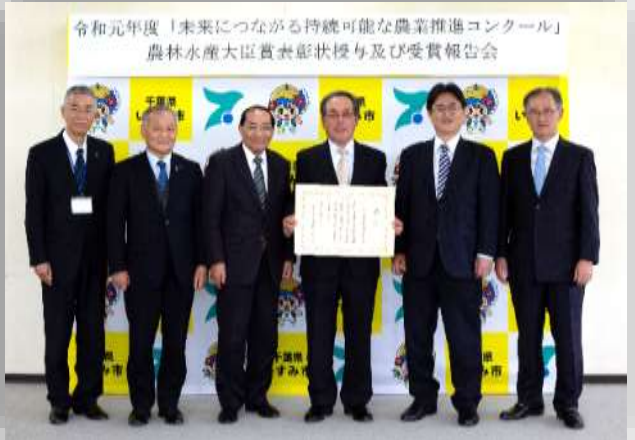
■いすみ市の有機農産物の学校給食利用、成果

- ・有機農業者ゼロから4年で産地を形成
- ・学校給食における残食の減少
- ・イメージアップと認知度向上
- ・移住者の増加
- ・農産物のブランド化
- ・農業所得の向上
- ・新規就農希望者の増加

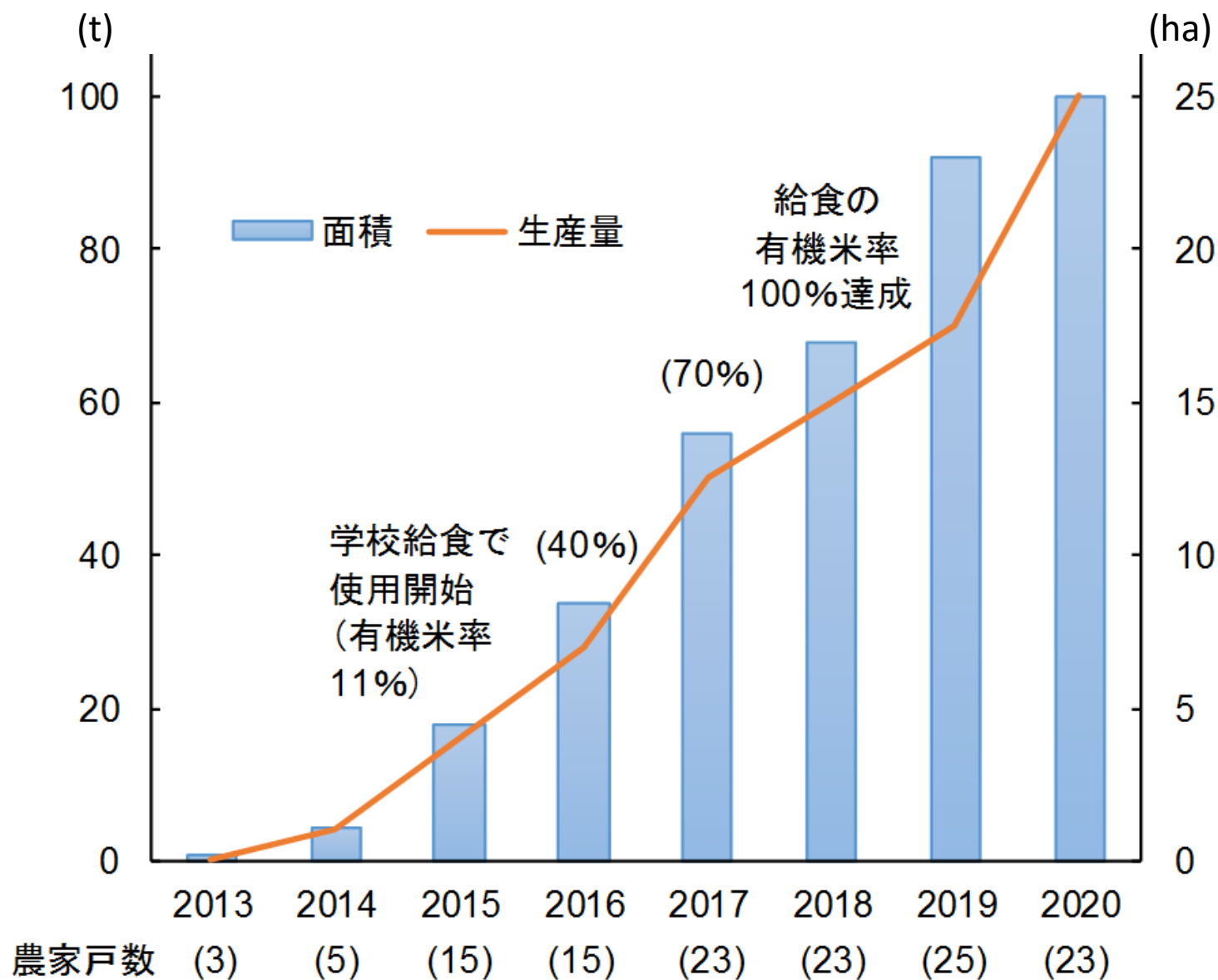
その他



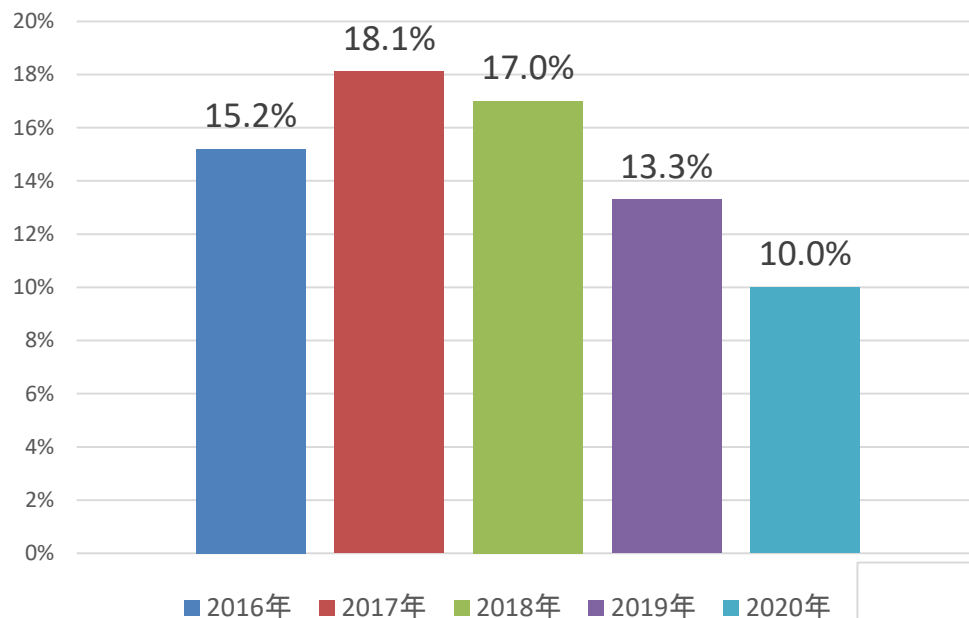
未来につながる持続可能な農業推進コンクール
農林水産大臣賞(2020)



有機米生産の推移(いすみ市)



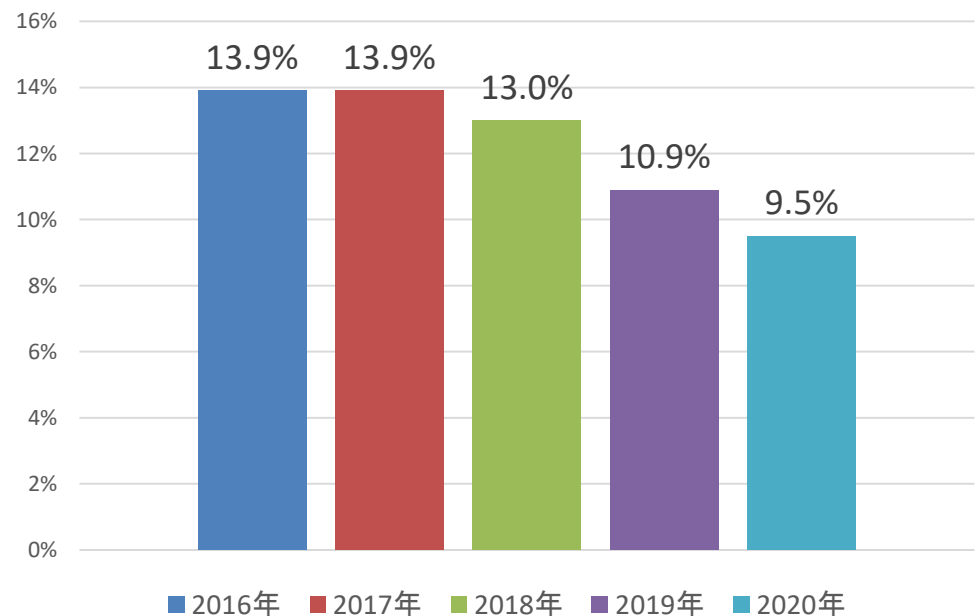
学校給食主食(お米)の残菜率(年平均)



有機の給食を本格的にはじめてから(2017年10月)、お米の残食が年々大幅に減少

給食全体の残食も年々減少

学校給食全体の残菜率(年平均)



2019年版 第7回「住みたい田舎」ベストランキング発表!

人生がもっと豊かになる! 田舎暮らしの本 2019年2月号 定価 800円

田舎暮らし

大反響!

全国663
自治体が
回答

旬の
「住みたい田舎」
をご紹介します!

親子の絆と
かわいい姿に感動!

動物の赤ちゃん
フォトブック

別冊付録
心が温かくなる
動物親子の
傑作写真集!

発表! 2019年版 第7回

「住みたい田舎」 ベストランキング

- ◎大分県豊後高田市が7回連続ベスト3入りを達成!
- ◎鳥取県鳥取市が3部門で1位に!
- ◎千葉県いすみ市が新設「自然の恵み」部門1位

縦読み付録

全国12エリア別トップ10 &
編集部注目のユニーク自治体

北海道、東北、北関東、首都圏、北陸、甲信、東海、近畿、中国、四国、北九州、南九州
各部門トップ10市町村を発表!



人口10万人未満の
小さなまちランキング

総合第1位
大分県豊後高田市

自然の恵み第1位
千葉県いすみ市

若者世代が住みたい田舎第1位
シニア世代が住みたい田舎第1位

大分県臼杵市

子育て世代が住みたい田舎第1位
鳥取県鳥取市

人口10万人以上の
大きなまちランキング

総合第1位
自然の恵み第1位

若者世代が住みたい田舎第1位
鳥取県鳥取市

子育て世代が住みたい田舎第1位
栃木県栃木市

シニア世代が住みたい田舎第1位
福岡県北九州市

太田洋

いすみ市長より
受賞メッセージ



「総幸福量」の高い
地域づくりを目指します

いすみ市では、市街地の真ん中を流れる夷隅川が、森をつくり里海を育てるため、海と山の恵みが豊富です。小・中学校の給食は、米飯すべてに市内で栽培された、農薬や化学肥料を使わない有機米を使用。健康、安心、環境にも配慮しています。

環境に配慮した農産物のブランド化

子どもたちの未来を支えるお米



JAL 国内線ファーストクラスのおもてなし
日本各地の名店プロデュース機内食
千葉県
～初秋を彩る地元食材を創作日本料理で～



Japan Airlines adopted the rice as in-flight meals of first class (2016)
日本航空ファーストクラス機内食に採用

Biocle
Biocle by CINAGRO

オーガニックお取り寄せ
でお買い求めいただけます！



いすみ市のモデル事例 令和2年度(個人農家の場合)

名前	Iさん(70代)	Jさん(50代)	Kさん(30代)
有機参入年数	6年目	5年目	2年目
経営面積	7ha	5ha	17ha
有機稲作面積	2.7ha(R3年は3.3ha)	1.3ha(R3年は2.3ha)	1.9ha(R3年は2.9ha)
有機平均反収 * 米選1.85mm	473kg	393kg	513kg
販売収入 有機米部分のみ ※JAS有機認証(転換期間中を除く)は、有機栽培3年目以降の圃場で取得	☆JAへ販売 (JAS有機) $23,000円 \times 128.5俵$ (特裁<無農薬>) $20,000円 \times 86俵$ <u>合計467万円</u>	☆JAへ販売 (JAS有機) $23,000円 \times 24.5俵$ (特裁<無農薬>) $20,000円 \times 64.5俵$ <u>合計185万円</u>	☆JAへ販売 (特裁<無農薬>) $20,000円 \times 111.5俵$ 計223万円 ☆小売店へ販売 (特裁<無農薬>) $?円 \times 51.5俵$ 計?万円 <u>合計223+?万円</u>
* 環直(1.2万円/10a)	324,000円	156,000円	228,000円

* 環境保全型農業直接支払交付金－有機農業の場合、10aあたり12,000円交付

■まち一体となり、環境と経済の両立する地域の実現へ

いすみ市内の里山・里地・里海の自然環境の保全・再生を通じた地域活性化を推進し、持続可能な生物多様性に富んだ自然と共生する魅力的な地域づくりに資することを目的とする

いすみ生物多様性戦略 2015年策定

自然と共生する里づくり協議会 2012年設立

自然環境保全・生物多様性部会 2012年設置 事務局:いすみ市農林課

環境保全型農業(水稻)部会 2012年設置 事務局:いすみ市農林課

地域経済振興部会 2013年設置 事務局:いすみ市水産商工観光課

有機野菜部会 2018年設置 事務局:いすみ市農林課

先導的プロジェクト 有機稲作の推進 2014年～
有機園芸の推進 2018年～

コウノトリ



- 環境創造活動のシンボル
- 生物多様性保全の指標種

◆協議会の主な取組

食・農・環境教育

ブランド化推進

体験活動

都市農村交流

実証試験

普及・啓発

第5回生物の多様性を育む
農業国際会議(ICEBA)2018



■第一人者に学ぶ



NPO法人民間稲作研究所
理事長

いなば みつくに
稲葉 光國 先生

東京教育大学大学院農学研究科修士課程修了。
1997年民間稲作研究所設立、1999年～理事長。
「有機農業技術支援センター及び有機種子供給センター」を開設。
兵庫県豊岡市「コウノトリと共生する水田づくり水田再生事業」受託。
千葉県いすみ市より有機稲作の技術支援の依頼を受け、学校給食
有機米100%実現を支援。
2017年～「ブータン王国での循環型有機農業の普及による地域創成
事業」実施。

■普及・啓発の経緯



■学校給食米における有機米の使用

- 安心・安全なお米を子どもたちに提供したい
- 子どもたちに地域の農業や環境のことを知ってもらいたい

年度	有機米導入量	割合
2015	4t	11%
2016	16t	40%
2017	28t	70%
2018	42t	100%
2019	42t	100%

全国に先駆け、学校給食のお米を全て有機米に

食育の推進

有機農産物の
消費拡大

有機農産物の
生産拡大

地域イメージ
の向上

持続可能性、循環型社会への転換を促進

■学校給食全量有機米に向けたプロセス

有機米と慣行米との価格差は147円/kg

一食当たり85g、米飯支給回数月平均13.5回とすると

$147\text{円}/1,000 \times 85\text{g} \times 13.5\text{回} = 169\text{円}$

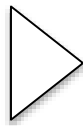
学校給食全量有機米に伴う

1か月の給食費値上げ分 169円 ←意外と安い！

がしかし、給食費値上げ＝家庭の所得と係るナーバスな問題



給食の安全性
向上を強調



慣行米のリスク
が争点に



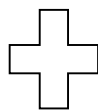
慣行vs有機
農業者間の対立

NG

対立軸を作らないためには・・・



子どもたちの
健全育成



産業振興
地域振興



有機米
導入量の拡大

地場産有機米の学校給食には、自治体独自の財政的支援が必要

給食食材の購入費(賄材料費)の区分

有機米の場合

有機米 ※固定	慣行 フサコガネ ※毎年 変動	賄材料費（地元産米）※一般財源で賄う 給食費に転嫁しない			
		賄材料費（一般）※給食費で賄う			

有機野菜の場合

有機野菜 8品目 ※固定	慣行野菜 8品目 ※卸売価格 + 仲卸経費 統計資料	賄材料費（地元産品）※一般財源で賄う 給食費に転嫁しない			
		賄材料費（一般）※給食費で賄う			

有機米導入に係る追加予算の積算例

※ 下記に例示する価格は、いすみ市における実際のお米の価格とは異なります。

有機コシヒカリ		慣行フサコガネ		差額
430円/kg	－	300円/kg	=	130円/kg

JAから見積をとる

差額		年間使用量		年間予算額
130円/kg	×	38,000kg	=	4,940(千円)

有機野菜導入に係る追加予算の積算例

※ 下記に例示する価格は、いすみ市における実際のニンジンの価格とは異なります。

有機にんじん		慣行にんじん		差額
400円/kg	－	200円/kg	=	200円/kg

卸売価格(統計) + 仲卸経費(統計)をもとに積算

差額		年間使用量		年間予算額
200円/kg	×	900kg	=	180(千円)

■有機米給食と産地計画

テーマ:「学校給食需要をとおして有機米産地をつくる」

“学校給食全量42トンを供給するために”

↳10ヘクタール以上の有機水田が必要になる

↳10～15人の有機農家を育成できる

↳全量達成後は、一人あたり0.5～1ヘクタール増やすことで20～40トン計画増産できる

=需要に応じられる(産地の条件)

学校給食に使用することで売れ残りの心配がなく、有機米生産を進展させることができる

= はじめから売り先が見えた形で有機米の産地化に乗り出すことができる点において画期的

農家の生産意欲(子どもたちのため)が向上

千葉県木更津市で全量化(およそ170トン)に向け進展中
=このモデルには普及性がある(どの自治体でもできる)

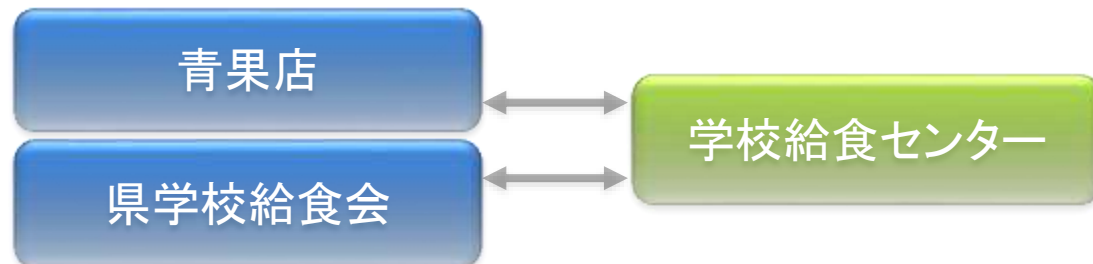
有機農産物の行き先を大消費地だけに向けず、地域内消費に向ける。むしろ、学校給食需要をつうじて産地形成をする方が、地域全体としてずっと良いのでは

代表的事例は愛媛県今治市=食の流通の再地域化



■学校給食へ地場産有機野菜を導入

通常の給食野菜の流れ



青果市場の野菜が安定的に供給されるシステム

→地産地消は県内産がメイン

→**地元野菜は供給できない！**

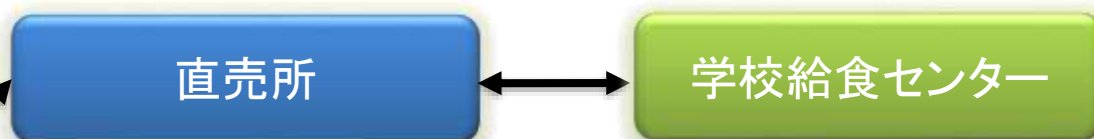
学校給食有機野菜供給体制構築事業 2018年～

○給食センターの現体制で**無理なく使用できる品目から優先**

2021年度は、有機ニンジン、有機コマツナ、有機メークイン、有機タマネギ、有機ニラ、有機ネギ、有機ダイコン、有機キャベツ

いすみ産有機野菜の流れ

品目選び～作付け、納入まで、定例会で協議



作付け・出荷調整会議

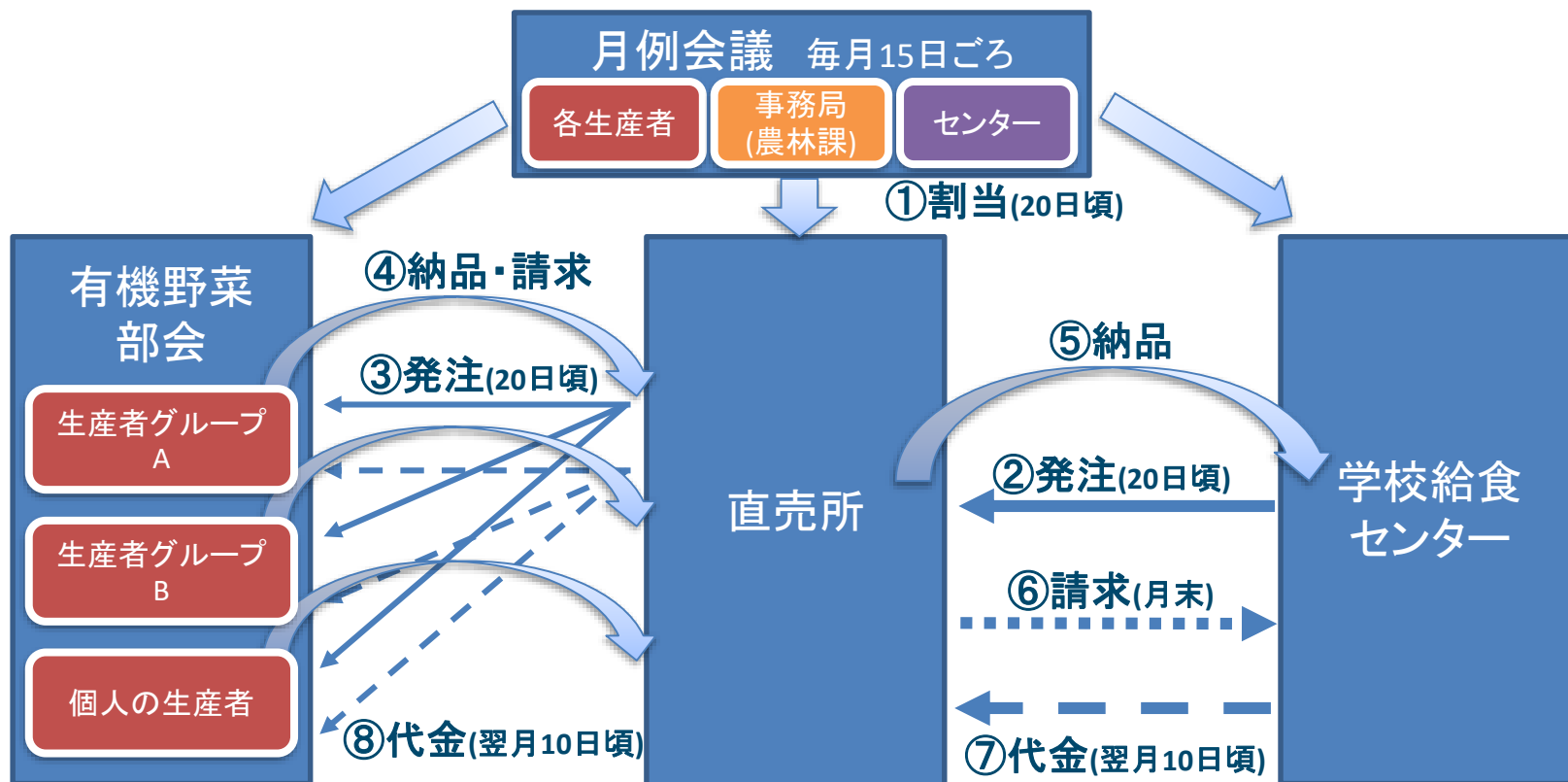


学校栄養士による生育確認

学校給食用有機野菜の流れ

◎農林課職員が「地産地消コーディネーター」の役割を担っている

例えば、①割当の作成と関係者への通知、②割当の変更、③不足調整(まず直売所に対応、直売所が無理ならセンターへ連絡し、他の業者に対応)等



学校給食用有機野菜使用品目及び納品規格・基準一覧

品目	規格	基準(g)	基準(cm)	調整
小松菜	M・L		「草丈」 20cm以上	・根を切る。 ・葉先に傷みのないもの。 ・抽苔していないもの。
むき玉ねぎ	L		「1個直径」 8cm以上	・根を切る。 ・頭を落とし外皮をむく。 ・身が締り緩みのないもの。 ・抽苔及び萌芽していないもの。
じゃがいも	2 L	「1個重量」 170g以上		・土をよく落とし風乾する。 ・日焼、緑化、萌芽のものを除く。 ・異品種はまぜない。
長ねぎ	M～		「軟白部の長さ」 25cm以上 「軟白部の太さ」 1.3cm以上	・青葉は箱の長さに合わせて切断する。 ・抽苔及び萎凋のないもの。
にら	M～		「葉丈の長さ」27cm以上	・抽苔していないもの。
大根	S～	「1本の重量」 700g以上		・葉は根元から落とす。 ・岐根、裂根がないもの。 ・す入りの恐れ及び抽苔していないもの。
人参	2 L	「1本の重量」 230g以上		・葉は根元から落とす。 ・岐根、裂根がないもの。 ・抽苔していないもの。
きゃべつ	S～	「1個の重量」 700g以上		・茎を切る。 ・外葉をむく。 ・適度に結球し、裂球していないもの。 ・抽苔していないもの。

【共通の調整について】

新鮮であること。
泥をよく落とす。
虫がついていないもの。
凍害、傷害ないもの。
枯葉、黄化を除く。

機械で裁断する都合上、大ぶりの規格が求められる品目もある
→給食の規格に合う品種を選ぶことで対応

■有機米給食と連携した食・農・環境教育

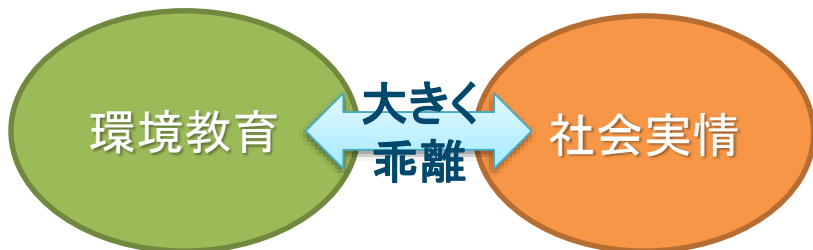
「環境」と「農業」と「食」を一体的に扱う教育プログラムの開発に着手
一年間で30時限(15テーマ×2時限)を扱う



◆従来の教育

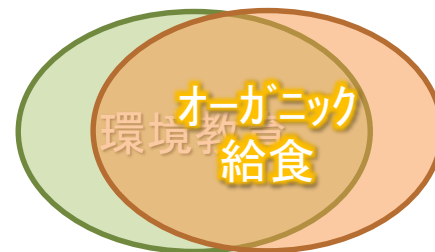
「環境教育」と「食育」と「農業体験」が
一体的に扱われていない

→農業の多面的価値を理解できない



◆いすみ市の食・農・環境教育

→健全な環境が、自身の健康と
健全な社会を保障している



■子どもたちが成長し、やがて築く未来の食卓 と、未来の食卓に支えられる農業・農村に大 きく期待する



ご清聴ありがとうございました